2018年06月08日 中日新聞 朝刊【社説】オピニオン面 5頁

海のプラごみ

誰がクジラを殺すのか

七つの海をプラスチックがわが物顔に泳ぎ回って、生き物が悲鳴を上げる―。そんな世界が現実になりつつある。クジラや魚の危機は必ず人にも及ぶ。温暖化並みの対策が求められているのだが。

先月末、タイ南部の海岸にコビレゴンドウというクジラの仲間が打ち上げられ、五日後に衰弱死した。おなかの中から、袋など約八キロのプラスチックごみが見つかった。それが衰弱の原因だった。

二月末、スペイン南部に流れ着いたマッコウクジラの体内からは、約三十キロが検出された。

世界の海はプラスチックのごみに満ち、生態系の乱れを加速させている。事態は深刻なのである。

国連環境計画（ＵＮＥＰ）が五日公表した報告書によると、世界のプラスチックの廃棄量は年々増え続け、二〇一五年には三億トンに達している。このうち約半分を、レジ袋やペットボトルといった使い捨て製品が占めている。

使い捨てプラ製品の廃棄量は中国が最も多い。しかし一人当たりでは米国が世界一、次いで日本、欧州連合（ＥＵ）の順である。

海を漂うプラごみは、紫外線や波の力で分解されて微小な粒子に変わる。直径五ミリ以下のものをマイクロプラスチックと呼び、洗顔料や歯磨き粉などに含まれるもの（マイクロビーズ）もある。

これらはポリ塩化ビフェニール（ＰＣＢ）のような有害物質を吸着する性質があり、のみ込んだ魚を食べた人間への影響も懸念されている。今や廃プラ問題は、温暖化に次ぐ国際環境問題になったと言われており、危機感を抱いた欧米やアフリカなどは、使い捨てプラの規制強化を進めている。

ＥＵは先月末、ファストフード店で使われるスプーンや皿、ストローなど、使い捨てプラ食器を禁止するよう、加盟国に提案した。

米国は一五年、マイクロビーズの配合の禁止を決めた。フランスは二〇年から、使い捨てプラ容器を禁止する。

日本では例えばレジ袋の削減は、企業や自治体の自主的な取り組み任せ。政府としては「プラスチック資源循環戦略」の策定は進めるものの、今のところ、国として使い捨て製品の流通規制にまでは踏み込むつもりがなさそうだ。

プラごみを作り、捨てるのは人だけだ。人の仕業は必ず人に環（かえ）るというのも温暖化と同じである。海洋国、そして廃プラ大国日本は、ここでも世界の大きな流れに取り残されていくのだろうか。

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています